



ピッポ新聞

2006

5

No.209

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

回答お待ちしております！

拝啓

福音館書店 田中秀治取締役・
編集部長 さま

連休も終わり、このところすぐれない空模様が続いていますが、いかがお過ごしでしょうか。

残念ながら、この空模様のようにぼくの気持ちも曇りがちです。と言うのも、3月号のピッポ新聞を通じて、貴編集部に公開質問状を出させていただきましたが、未だに(五月十六日現在)その回答をいただけません。

連休の始まる前(四月二十七日の木曜日)にいつ頃お返事をいただけるかを、貴編集部にご電話でお尋ねいたしました。応対していただいた方と、次のような会話がありました。

まずぼくが「科学書の編集長をおねがいいたします」といったところ、「ここは、かがくのとも編集部です。でもちよつとおまちください」少し待っていると、「今日は科学書の編集長は休みです」という返事だったので、「他の責任者の方はおいでになりますか?」とお尋ねしたところ「田中編集部長ならおりますが」ということでした。そこで「お願いします」というと「ちよつとおまちください」。待っていると「きよう月曜日は取締役会で席をはずしていません」というよく分からないことをいっているので、ぼ

くは戸惑ったのですが「今日は木曜日で月曜日ではないですよ」というと「すみません、間違えました。ちよつと席をはずしているようですが、後ほど田中の方から電話をさしあげます」ということでした。

ぼくは田中編集部長なら居るとおっしゃったので、おねがいしたのですが、今度は席を外しているというおかしな返事です。でも、電話をくれるということでしたから、細かいことは言わないで、「ではお待ちしていますから、お願いいたします」といって、電話を切ったのです。応答してくれた方も何故か戸惑っているようでした。

当然その日に田中さんから電話があると、心待ちにしていたのですが、電話をいただけませんでしたね。連休前でお忙しいのだろうと思いつつ、ただただお待ちしていました。しかし、連休も終わりましたが、現在に至るまで電話はおるか、質問の回答書さえいただけないので、これはいかなる理由なのでしょう?

ここに再度、貴社への質問要旨を書きます

質問の主たる点は2点です。

まず、貴社から発行されている「みるずかん・かんじるずかん全20巻」のうち現在在庫(流通している)があるのは5点です。他の15冊は品切れになっていきます。ところが、このうち12点が復刊され、こどもとも社を通じて販売されていますが、(こどもとも社はこれを書店で

は購入できないと強調して、ごどものとも社の専売品であることをキャッチコピーにして販売している(これはどうということなのでしょう)か。

貴社にこの、ごどものとも社が売っている本を発売すると、当然のようにごどものとも社の専売品であるから出荷できないと拒否されてしまいました。

出版社が重版した本を「ある会社のため」の専売品であるから」と書店への出荷を拒否することは、出版社自らが、読者の知る権利を制限することになりませんか？

ここで聞きたいのは、貴社が法的に違反しているか否かではありません。もちろんその疑問も抱いてはいますが、ぼくはここで法律論争をするつもりはありません。あくまでも、社会的存在である福音館書店の道義的責任についてお聞きしています。

知る権利とは(表現の自由でもあると考えますが)読者が読みたいと考えた場合、その本がいつでも自由に手に入れることができることを保証するのも重要な要素の一つだと思います。これを保証するのが出版社と書店の仕事の一つだと考えています。貴社は何故流通の過程で売る相手を選別することによって、読者を差別するのでしょうか。

このことは出版社自らが読者の知る権利を否定し、強いては表現の自由を否定する行為ではないのですか？貴社は出版・表現の自由をどのように考えているのかを含めて、何故読者を差別するのかをお答えください。

さい。

もう一つの質問は、

同じ本なのに定価が異なるのはどうしてですか？

という点です。

この「みるずかん・かんじるずかん」の定価は各1365円(消費税込み)ですが、ごどものとも社が販売している同じ本は1000円(消費税込み)です。365円も差があるのはどうしてなのでしょう？

同じ本に二つの異なった定価(二重価格)を付けたことが、ぼくにはどうしても理解できません。

貴社は読者を差別するのはどうしてですか？

そもそも、この1000円の本は、「ごどものとも社」を通じてしか買うことができないうけですから、買うことができないう多数派の一般の読者を差別していることになりませんか。

しかも、たとえ買うことのできる環境にいる読者も、普通われわれが本屋で一冊一冊好みの本を選んで買うようにはできないのですね。なぜなら、十二冊をセットで買わなければならないのですから。

セット販売は自分がいらぬものまで買わなければ、欲しい本も手に入れることが

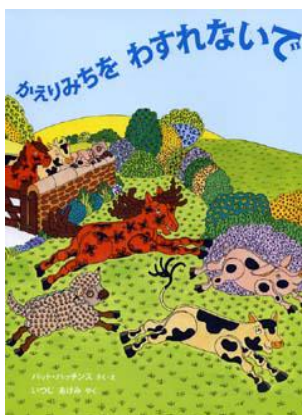
できません。これは巧妙な抱き合わせ販売であると思いますが、この点の貴社のご見解もお聞きかせください。

田中さん、貴社に質問を出してすでに2ヶ月以上経ちました。ぼくは福音館書店は読者に、この2点について解るように説明する義務があると考えます。どうぞ、回答を至急いただけることを願っています。

ピッポ 伊藤俊男

ねー、この本読んだ？

『かえりみちをわすれないで』(パット・ハッチンス・作 井辻朱美・訳 1260円 福音館書店)



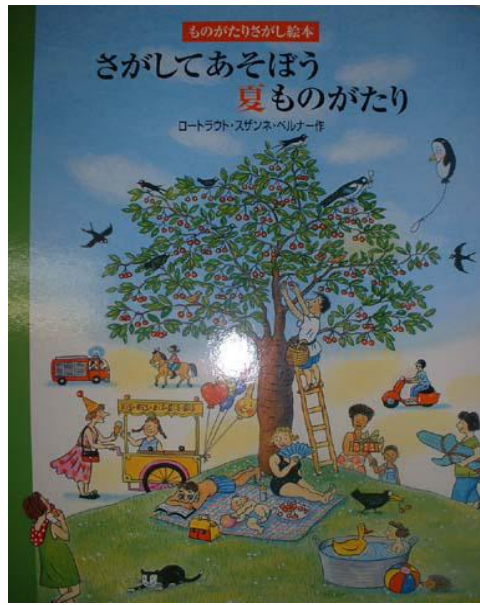
これは「ティッチ」の作者ハッチンスの新しい絵本。こぶたとこひつじとこうまとこうしが朝ご飯を食べた後散歩に出かけお母さんたちに言われたようにごはんに

までに、道に迷わず戻ってくるという典型的な「行つて帰る」ものがたりです。登場する動物たちは木のおもちゃであるが、描

かかれている表情を通して動物たちの気持ち
が伝わってきます。2から3歳ぐらいから
楽しめます。

『さがしてあそぼう 夏ものがたり』(ロー
トラウト・スザンネ・ベルナー・作 2
520円 ひくまの出版)

この絵本は文字無し絵本です。「ものがた
りさがし絵本」とサブタイトルが付いてい
るように、読者であるあなたがものがたり
を絵にしたがって作ることが出来ます。発
見もあります。絵本は冬から始まり春・夏・
秋と4シーズンの4冊あり、各2520円



です。紙も合紙で34センチ×26センチ
と大型です。各巻とも同じページには同じ
場所の絵が描かれています。描かれている人
物は同じである場合もあります。この絵本
のもう一つの特徴は建物の内部が(人々の
暮らしの様子)が解るように描かれている
ことです。例えば、3階に住んでいるのは

女の子とそのお父さんの二人暮らしで、ど
うやらお母さんがいないようだとか想像す
る事もできます。最初の冬の巻では幼稚園
の建設予定地が春夏と季節が進み秋の巻で
はその落成式が描かれていたりするのです。
細かい個所まで楽しめる絵本でもあります。
一人の登場人物を追っていくことで、あな
たの物語を作れます。

『たからもの』(ユリ・シュルヴィッツ・
作 安藤紀子・訳 1260円 偕成社)
むかし男は都の宮殿の橋の下に宝物が埋まっ
ている夢を何



度も見た。そ
こで野越え山
越えして都へ
到着した。と
ころが宝物を
は見つからず、
衛兵の隊長が
男に言った

「オレの見た夢はお前の家の暖炉の下に宝
物が埋まっている夢だ」と。男はそこで、
野越え山越えして家にもどって、暖炉の下
を掘ってみると・・・。「ちかくにあるも
のをみつけるにはとうくまでたびをしなけ
ればならないこともある」シュルヴィッツ
の絵本の世界には哲学がある。

『ブナの森は宝の山』(平野伸明・文 野
沢耕治・写真 2520円 福音館書店)
この本は文と写真でブナの森の一年を綴っ



んなに素晴らしいかをこの本は伝えてくれ
ます。ブナ林は多くの水を蓄え、その水は
少しずつ沢となつて下流へ流れ出します。
その流れには多くの水生昆虫が生息し、イ
ワナなどはそれを餌にして生きています。
しかし、その素晴らしいブナの森を全国各
地で破壊し続けたのが、わたしたち人間だ
ということをお忘れてはいけません。

『ブンブンハチがとぶ』(國房魁・写
真・文 2625円 新日本出版)



副題に「歌いたくなる写真集3」とあるよ
うに、まずこ
の本は、多く
の子もたち
の生き生きと
して遊ぶ姿や
驚きや笑顔の
表情の写真集
である。つぎ
に、これはお
馴染みの童謡

の詩集でもある。まどみちお・阪田寛夫・
中川李枝子などの絵本でお馴染みの作者の

詩もある。しかし、純粹な童謡歌集ではないので、楽譜はつけない。子どもたちの写真を見ながら親子で一緒に歌うのもたのしいだろうな。さてあなたはいくつ歌えるかな？ほかに『ドンと鳴った火花だ』『かあさんおかたをたたきましょ』も出ている。

『バナナテイル ヒッコリーの森を育てるリスの物語』

『グリズリー・ジャック シエラ・ネバダを支配したクマの王』

(アーネスト・T・シートン・作・絵 今泉吉晴・訳 各945円 福音館書店)



動物学者の今泉吉晴さん訳のシートン動物記8・9巻が出た。今泉さん訳のシートン動物は、

わたしたち読者がこれまでいっていたシートンのイメージを大きく変えてくれる。それは訳

者の今泉さんが単にシートン動物記を日本語に置き換えるという姿勢でこれを翻訳し

たのではけつしてないからである。動物学者として真摯な態度で、様々な角度からシートンの周辺の世界に踏み込んで、シートンが生きた時代の文献を可能な限り収集し、これらを研究し、読みこなしした。そのうえで、評伝シートン(『子どもに愛されたナチュラリスト シートン』 1890円 福音館書店)で彼のナチュラリストとしての人となりをあきらかにし、その生き方に共感して生まれたのがこの新訳のシートン動物記なのである。

といつても、よくある学者の難しい表現の文などではなく、わかりやすく豊かな文体でそれは綴られている。特に巻末にある注の説明は、単なる言葉の説明でなく、それは正確な知識に裏付けされた説明である。ぼくはそこから、生き物に対するちよつとした知識を得ることができ、シートンの生きた時代背景なども想像でき、このことが、この本を読む楽しみを増してくれたのである。

さて、今回の8巻はハイイロリスのバナナテイルが、祖先から受け継いだ危険に対する本能と、自らの体験を積み上げた智慧を活かして家族と共に森で生きていく物語。

バナナテイルがきのこ中毒になり、その苦い経験がどのようにして子どもたちへ受け継がれるのかを描いているところとか、ヒッコリーの森はそのハイイロリスの助けを借りて受け継がれて行くことなど、自然

の循環をえがいた場面は興味深い。9巻のグリズリー・ジャックがクマとして誇り高く生きる姿には大きな感動を覚える。お薦めの2冊である。

編集後記

先日車の中でラジオをつけたら、山(森)と川と海のこと話が語られていた。聞いてみると、それがどうやら、大井川について話しているようであった。古老が語ることは上流の森が豊かで無ければ駿河湾の魚たちにも影響が及ぶいのである。今のよう

に単一林(杉の植林)でなく自然の雑木林こそ大切なのだとなウンサーは声高に言う。大井川の中流域にある町(?)の町長が言う「今度長島ダム湖(接阻湖と言うのだそうである)で大井川の自然を考えるイベントをやるから」と。ぼくはこれを聞いていて、皮肉に思ったものである。そのイベントに東海フォレスト(東海パルプ)と中部電力が出てきて「大井川流域の自然を守ろう」などと言ったとすれば、見事にこれらの人たちはブラックユーモリストであるだろう。彼らの語ることはすべてもつとものであるし、誰が聞いても反対の余地は無い。だが、大井川流域の自然を破壊素続けたのはまぎれも無くこれらの人だ!東海パルプは戦後大井川の源流域の自然林をすべて伐採した張本人であるし、中電は大井川水系に日本で一番たくさんダムと発電所を作ったし、長島ダムを推進したのは地元町長だった。これらの人たちが大井川の流域の自然を大切になどと言っただからブラックユーモアなのである。